

ルーマニア保安警察の供述調書にみる シオランとエリアーデ

奥山 史亮

1. はじめに

本稿では、ルーマニアの保安警察が国内の反体制派を取り調べた際に作成した供述調書と裁判記録から、ミルチア・エリアーデとエミール・シオランに関する記述を抽出し、その特徴を整理する。そのことにより、国内の反体制派と保安警察、および亡命者組織の関係性のうちにエリアーデとシオランの言論を再定位することを目的とする。

第二次世界大戦後にフランスに亡命したエリアーデとシオランは、亡命者向けのラジオ放送「自由ヨーロッパ」を担当したモニカ・ロヴィネスクやサンダ・ストロジャン、ヴィルジル・イエレンカらと協力し、反体制運動を展開した。彼らが反体制運動に身を投じた時期は、フランスの各植民地で解放闘争が勃発した時期と重なる。ベトナム民主共和国の独立をめぐる第一次インドシナ戦争では、1954年のディエンビエンフーの戦いが契機となり、フランス軍はベトナムからの撤退を余儀なくされた。同年のアルジェリアでは、アルジェリア民族解放戦線が組織され、独立戦争がはじまった。

これらの解放闘争では、ホー・チ・ミンやフランツ・ファノンといった植民地を代表する知識人が、イデオログとして活躍し、植民地側から思索した人間や文化のあり方をフランス本国の知識人に突きつけた。とりわけ、アルジェリア民族解放戦線の一員として独立戦争に参加したファノンは、アルジェリア人がとるべき正当なる戦略として、暴力をともなった非植民地化を提唱し、サルトルをはじめとするフランスの知識人に大きな衝撃を与えた。ファノンの著書『地に呪われた者』では、解放闘争において民族文化を表象することの役割が論じられている。ファノンによれば、植民地化とは原住民の日常生活を暴力的に抑圧するだけでなく、原住民が営む文化をも暴力的に抑圧し、原住民の文化を貶めてヨーロッパの文化価値を広める現象である。それゆえに、原住民知識人が自民族の文化を植民者の文化に抗するかたちで表象することは、ヨーロッパ文化を排除するという重要な役割を担う。しかし、植民者から借りた言葉と学識を用いて自民族の古い詩歌やフォークロアの価値を強調することは、解放闘争にとって意味がないばかりか、植民者からも被植民者からも必要とされなくなった原住民知識人の保身的な自己主張に過ぎないという。ファノンは、民族文化とは暴力をともなう解放闘争のうちから生まれてくるものであり、原住民知識人は解放闘争に直接的に参加し、そのうちで生まれる文化を表象すべきであると強調している。

植民地からフランス人を暴力的に排除することを訴え、ヨーロッパの人間を敵とみなすこととはばからないファノンの言論は、既述のように、フランスの知識人たちに自分たちの役割や言葉の意味を再考することを強いた。エリアーデとシオランは、まさにそのような時代にパリで亡命者として生活していた。エリアーデが日記や自伝でファノンの名前に言及した箇所は確認できない。しかし、解放闘争のうちに身を置きながら文化のあり方について思索したファノンの言葉は、反体制運動に参加しながら宗教や民族のあり方について思索しようとしたルーマニア人亡命者たちにとって、親和性のあるものとして意識されたことが推測される。

反体制運動におけるエリアーデの見解については、ほかの場所⁽¹⁾で明らかとしたために詳述することはしないが、彼はロヴィネスクやシオランらと協力しながら、共産党の弾圧によって活動を制約された本国の知識人に代わり、亡命者がルーマニア民族独自の文化を創作し、共産党支配下の文化を駆逐することを目指した。一般に、このような抵抗文化を提唱することは、共産党支配下で創作された偽りの文化を排除すれば、その下から民族の純粋な文化があらわれると考える排外的な民族主義に陥り、支配者と被支配者が織りなす相互交流と文化創作を見落とす傾向にある。しかしエリアーデは、ルーマニアの民族文化のうちに「普遍性」を見出し、その普遍的側面が他文化と交わる場所として機能することを強調した。ルーマニア文化の民族性と普遍性を同時に見据え、両者のバランスをとりながら反体制運動を展開した点にエリアーデの特徴があると考えられる⁽²⁾。

しかしながら反体制運動とは、体制に抵抗することなく、体制が示す文化価値にしたがって生きている数多くの人間の生活基盤を揺るがし、場合によっては破壊しようとする行為である。反体制運動を支持する人間は、自らの言動が多くの人間から生活の場所を奪う可能性を帯びていることに無自覚であってはならない。ファノンの文化論を踏まえるならば、知識人の言葉は、解放闘争に直接的に参加することなく、現地の状況を把握しないままに発せられるものであってはならない。以下で論じるように、エリアーデとシオランは学界のみを活動の場とする学者の枠を踏み出し、反体制運動のイデオログとして活動していた。そのため、彼らの言論を上記の点に照らし合わせ、再考する作業が不可欠になると考えられる。

本稿は、このような問題に取り組むために、エリアーデとシオランの言論がルーマニア国内の人間に対してどのような影響を及ぼしたのかを整理する。具体的には、1959 - 60年に、反体制運動の中心人物であったコンスタンティン・ノイカやサドヴァ・マリアという人物たちが、エリアーデとシオランにかかわったために逮捕されたが、その際に保安警察が作成した供述調書を整理し、エリアーデ、シオランと国内の反体制派、保安警察の関係性を明らかにすることを目指す。

2. ルーマニア演劇団のパリ公演とサドヴァ・マリアの活動

最初に、ノイカたち国内の反体制派の活動と、彼らが拘束されるに至った経緯を概観する。ノイカは、エリアーデやシオランと共にブカレスト大学文学部のナエ・イオネスクのもとで哲学を学んだ。第二次世界大戦後、ノイカは刊行が禁止されていた哲学書や文学作品に関する研究会を、インドの古典学者として知られるセルジル・アル＝ジェオルジェや正教会修道士のニコラエ・ステインハルトらと共に開催していた。保安警察は、ノイカたちの活動は「レジオナールのな反体

制運動」であり、治安を乱す可能性を有していると早い段階からみなし、彼らを逮捕し、投獄する機会を狙っていた。そのような逮捕の機会とされた出来事のひとつに、ルーマニア演劇団の女優をつとめたアクテリアン・サドヴァ・マリアをめぐる事件がある。

ルーマニアは、ジュネーブ会議による緊張緩和の時期であった 1956 年に、パリで開催された民族演劇の国際フェスティバルに演劇団を派遣し、I・L・カラジャレの「失われた手紙」とミハイル・セバスティアンの「最後の時間」をサラ・ベルナール劇場において上演した。戦後、ルーマニアの演劇団が国境を越えて公演したのは、これが初めてであった。公演には数多くの亡命者も観劇にやってきたが、共産党の日刊紙『閃光 (Scinteia)』(1956 年 7 月 4 日)は、亡命者たちを「裏切り者」と表現することなく、役者と亡命者たちの交流を好意的に記事にした。その一方で、保安警察は演劇団の公演を、パリの亡命者たちに接触し、亡命者組織の構成や活動に関する情報を得たり、説得して寝返らせたりする絶好の機会とみなしていた。そのため、役者たちには密偵としての任務が与えられ、亡命者組織に関する情報を収集することが命じられた。とりわけエリアーデやシオランといった亡命者組織の中心人物に接触することは、優先的な任務とされた。

サドヴァ・マリアは、戦前から演劇の分野で高い評価を受け、ブカレスト大学で学び、レジオナルを支持した文化人のひとりであった。戦後は、共産党に協力しながら役者としての活動を継続し、模範的な労働者として勲章を授けられたこともあった。さらに彼女の再婚相手であるアクテリアン・ハイグは、著名な文筆家であり、エリアーデやシオランと親しい間柄にあり、ともにレジオナルを支持する活動を行なった人物として知られていた。サドヴァ・マリアもアクテリアン・ハイグと結婚することで、エリアーデやシオランと交遊する機会が数多くあった。そのため、彼女には、パリでエリアーデとシオランに接触する任務が課せられた。

サドヴァ・マリアはパリに出発する前に、エリアーデとシオランに対して、帰国すること、少なくとも共産党に敵対しないことを説得するように当時の文化相であったコンスタンツァ・クラチウンから命じられた。帰国後のサドヴァ・マリアを取り調べた取調官のミルチア・オネアが作成した 1959 年 11 月 5 日付けの供述調書には、サドヴァ・マリアが文化相の指示に従い、エリアーデとシオランに接触したことが記されている⁽³⁾。さらに、演劇団をパリに派遣する目的について記した共産党の報告書には、サドヴァ・マリアをはじめとする役者たちが、ルーマニア人亡命者たちの活動状況を探る任務を担ったことが明記されている⁽⁴⁾。

その一方で、サドヴァ・マリアは、ノイカとツツェア・ペトレといった反体制派の人間とも出発前に会談する機会を得ていた。その会談において、反体制派は、エリアーデたちに接触したときに国内の状況を伝えるようにサドヴァ・マリアに依頼していた。1959 年 11 月 9 日付けの供述調書には、サドヴァ・マリアの以下のような証言が記されている。この供述調書もミルチア・オネアが作成したものである。

私は、パリ公演に出発する前に、この公演について、ツツェア・ペトレにも伝えました。その後ツツェア・ペトレは、レジオナルのエミール・シオランとミルチア・エリアーデに自分の著書を渡して、読んでもらえるようにしてほしいと私に依頼しました。この著作とは、実際のところ

ろ、ツツェア・ペトレの原稿であり、ルーマニア民族の戦いの伝統を民族主義的で排外主義的なものとして描き直したものです〔中略〕。同じように、パリに出発する前にコンスタンティン・ノイカという者が私を尋ねてきました。そして、〔パリに亡命している〕ノイカの妻が演劇を観に来てきたら、子どもたちからルーマニア語を遠ざけないように伝えるよう依頼されました。さらに、彼が元気であることも伝えるように依頼されました。そのほかにノイカからは、逃亡者のエミール・シオランとミルチア・エリアーデによろしくと伝え、彼が C. Lung の強制居住地にいることを伝えるように頼まれました。レジオナルであるアクテリアン・アルサヴィルの姉妹からは、彼女らの疾患の治療方法をパリのオベリング先生にきいてくるように頼まれました。〔中略〕。そのほかの者には、パリに出発することを話したことはありません⁽⁵⁾。

供述調書に記されたアクテリアン・アルサヴィルとは、サドヴァ・マリアの配偶者アクテリアン・ハイグの兄弟であるため、「アクテリアン・アルサヴィルの姉妹」とはサドヴァ・マリアにとって義理の姉妹である。義理の姉妹からの持病に関する依頼は、ルーマニアの医学の後進性を示すかもしれないが、重大な政治性を有するものではないように思われる。しかしペトレとノイカは反体制派の重鎮として著名な人物であったため、彼らとエリアーデらの連絡を取り持つことは、反体制運動に協力する政治性を有していることが明らかである。サドヴァ・マリアが、その政治性を自覚していなかったとは考えにくい。サドヴァ・マリアが、なぜ共産党と反体制派の両方から依頼を受けたのかは保安警察関連の資料のみからは明らかでない⁽⁶⁾。しかし、彼女が国内外のルーマニア人の交流において重要な役割を果たしていた可能性はきわめて高いと考えられる。

サドヴァ・マリアはパリに到着するとすぐにエリアーデと連絡を取り合い、会談の約束を取り付けた。同年同日付けの供述調書には、会談の内容に関する証言として以下のように記されている。

パリに到着し、ホテルに落ち着いてから 2 日後、ブランク・ドリナという者に電話をすると、その者がミルチア・エリアーデに電話をしてくれました。その後、エリアーデがホテルの私宛に電話をよこし、ホテルのロビーで会う約束をしました。エリアーデは約束の時間に妻と一緒にホテルにやってきました。ロビーで少し言葉を交わした後、私の部屋に入りました。私は部屋でツツェア・ペトレの著書を彼に渡しましたが、彼はそれを読んだ後、私に返しました。その際にミルチア・エリアーデは、ツツェア・ペトレは政治家のように振る舞っているが、政治的視野は持ち合わせていないと言いました。さらに、ルーマニアの状況は、R. P. R. [Republica Populară Română, ルーマニア人民共和国] の政治が宣言したようなものとはまったく「異なるもの」になるだろう、すなわち R. P. R. の状況は「きわめて悪く」なるが、そのことがルーマニア国民に「伝わらない」ように、政権はあらゆる手を尽くすだろうと話しました。同じようにエリアーデは、ルーマニアでは国民が「不満を感じる」ようになって、政府に抗する国内の反体制派の闘争は「表面的なもの」とどまり、国外からの活動がよりいっそう有効であるために、R. P. R. 政府に抗する活動は継続しなければならないと語りました。R. P. R. 政府は必ず崩壊するであろうし、その際に逃亡者たちは、〔政治〕 転換のための活動に力を尽くさなかったと恥じることにな

るからだと言いました。私の方からは、国内では当局がきわめて小さな抵抗までも取り締まっているので、活動がとても困難であることを伝えました⁽⁷⁾。

この記述からは、エリアーデが共産党政権を転覆させるための活動に積極的に取り組んでおり、反体制派のイデオログとして保安警察に報告されていたことが確認できる。

エリアーデは、ホテルでの会談の翌日にサドヴァ・マリアをレストランに招待した。サドヴァ・マリアはジェオルジュ・カルボレアヌとイオン・マノレスクというふたりの役者を同席させることで、エリアーデの招待に応じた。その食事の席では、演劇と芸術が話題にされたほか、国際的な政治情勢についても話し合われたという。具体的な会話の内容は明らかにされていないが、サドヴァ・マリアは、エリアーデの政治観が「彼の敵対的なバイアス」によってゆがめられ、共産党の政策にとって危険であると証言している。そのあと、サドヴァ・マリアは、エリアーデから自宅に招待され、話し合う機会を得た。エリアーデの自宅での会談の様子については、以下のよう

に証言している。

ミルチア・エリアーデの住居では、西欧で刊行されていた彼の幾冊かの著作、すなわち『禁じられた森』『神話とシンボル』『永遠回帰の神話』と『百科事典』の一冊を受け取りました。これらの著書を国内で紹介し、ほぼ皆がレジオナルであったわれわれの共通の友人たちのサークルに広めるために渡されたのです。

さらに、ミルチア・エリアーデの自宅にいたとき、私とエリアーデの会話は、R. P. R.の社会主義リアリズム文学に対して敵対的なものとなりました。私は、R. P. R.において刊行されたものは「無気力な性質」をもっており、政府に協力している作家たちは「本心から」書いているのでも喜んで書いているのでもなく、「強制されて」書いている等々と話しました。また、[ルーマニア政府に] 敵対的な会話内容として、文学と芸術活動は、報道機関をとおして政府の「管理下にある」ため、観客に受け入れられることもないような「下手な脚本」が作成されているということも私は話しました。さらにコンスタンティン・ノイカに関して、ノイカが現在では執筆をやめており、弟子を教育して生計を立てていることもミルチア・エリアーデに伝え、そのことについて話し合いました⁽⁸⁾。

この記述からは、サドヴァ・マリアがエリアーデから著作を託され、ルーマニア国内の知人のあいだに広めるように依頼されたことが読み取れる。エリアーデがどのような理念を国内の知人に伝えたかったのかは、明記されていない。しかしエリアーデの亡命者組織における活動を踏まえるならば⁽⁹⁾、エリアーデは、共産党のプロパガンダとして利用されていた文化の代わりに、真のルーマニア文化を描いた文学作品として『禁じられた森』を国内に広めることで、反体制運動を支援する目的があったと考えられる。『禁じられた森』の内容については後述するが、本書は1955年に刊行された作品であり、共産党成立以前のルーマニアでエリアーデが過ごした時期について描かれている自伝的小説である。

サドヴァ・マリアは、さらに、保安警察およびノイカとかわした約束のとおり、シオランと

パリで会談した。同年同日付けの供述調書には、会談の様子についてつぎのように記されている。

私はレジオナルの逃亡者であるエミール・シオランとも接触しました。彼はエリアーデと同様に、R. P. R.とりわけソヴィエト連邦に敵対的であることをその言論において表明しており、ソヴィエト連邦はヨーロッパ一帯に「奴隷化」を、彼の言うところの「スラヴの波」をもたらしつつあると断言しています。私はパリを発つときに、エミール・シオランから彼の著書『実存の誘惑』が10部入った包みを手渡され、この著書を国内で紹介し、レジオナルであったかつての「戦友たち」、政府に敵対するほかの者たちに配るように頼まれました。シオランによれば、ルーマニア人民とほかの出来事に関する彼の現在の考えを伝えることが目的でありました。私はシオランからこの包みを受け取る前に、書店で同じ本をすでに2冊購入していたので、同書を12冊、国内に持ち込んだこととなります。パリを発つときに、エミール・シオランから、レジオナルのコンスタンティン・ノイカとツツェア・ペトレにはかならず同書の幾冊かを渡すように念入りに頼まれたことも正確に申し上げます⁽¹⁰⁾。

この記述からは、シオランがルーマニア国内の反体制派と交遊をもつことを強く願っていたこと、自分の言葉の読み手として国内の人間を想定していたことが読み取れる。『実存の誘惑』の内容についても後述するが、本書は1956年にガリマールから刊行された論説集である。

帰国後にサドヴァ・マリアは、エリアーデとシオランの著書をノイカたち研究会のメンバーに配布した。1959年11月5日付けの供述調書には、著書を配布した目的について、「これらの著書を配布することにより、レジオナルの逃亡者の著書が普及することを目指し、R. P. R.に抗するプロパガンダになり得ることを考えていた」と証言している⁽¹¹⁾。この証言からは、サドヴァ・マリアが、エリアーデとシオランと約束したように、彼らの著書を反体制派に手渡し、反体制運動に加担したことを認めたことが明らかである⁽¹²⁾。

エリアーデは、既述のように、ルーマニアから西欧社会に亡命してきた人間を積極的に支援し、国内の反体制派と情報を取り合う活動を行っていた。シオランも、上記のように自身の著書を積極的にルーマニア国内に届けようとするほか、「遠方の友への手紙 (Scrisoare către un prieten de departe)」と題した書簡をノイカ宛に届けた⁽¹³⁾、ノイカの著書『ヘーゲルの物語 (Povestiri din Hegel)』⁽¹⁴⁾をパリで刊行する計画に協力したりしていた。エリアーデとシオランのこのような活動は、共産党の支配からルーマニアを解放し、ルーマニア民族としての独立した文化をあらためてつくり上げるという理念に基づくものであったと考えられる。しかし、自分たちの著作を国内で紹介してもらうようにサドヴァ・マリアに秘密裡に依頼するという行為は、ノイカたち反体制派だけでなくサドヴァ・マリアをも危険に晒す事態を招いた。ノイカとサドヴァ・マリアたちは、エリアーデらの著書を所持した罪により逮捕され、投獄されたのである。

1973年にガリマールから刊行されたエリアーデの『日記断章 (Fragments d'un Journal)』には、エリアーデがパリとシカゴで過ごした1945年から1969年までの出来事について書き留められている。しかし本書には、サドヴァ・マリアとの会談やノイカたちの拘束については記されていない⁽¹⁵⁾。そればかりか、サドヴァ・マリアと会談した年である1956年については、一行も記載がない。エリアーデは1956年9月から渡米し、翌57年にシカゴ大学神学部の教授に就任す

る。ヨーロッパで暮らした最後の年について、なにも記すべきことがなかったはずはなく、この部分の刊行を意識的に避けたと考えられる。シオランは、『カイエ』の1962年の箇所、「ディヌ〔ノイカの愛称〕の手紙に返事を出すとは何というヘマをやらかしてしまったことか。私が彼に返事を書いたのは——彼の孤独に同情したからであり、友達としての義務からだ。こと志に反して、私は彼の敵に武器を渡し、彼の破滅に手を貸したのだ」⁽¹⁶⁾と記している。シオランが記しているように、エリアーデとシオランがサドヴァ・マリアに著書を渡したり、ノイカに手紙を送ったりしたことは、ふたりの意図しないかたちで、保安警察が彼・彼女らを拘束するための証拠を提供することになった。

3. ノイカとサドヴァ・マリアに関する裁判記録

サドヴァ・マリアは共産党の密偵として活動したにもかかわらず、エリアーデとシオランとの交遊を継続したと疑われ、1960年2月10日にノイカたちとともに起訴された⁽¹⁷⁾。同年2月24日に開かれた裁判では、議長をアドリアン・ディミトリウが、判事をイオアン・ペトレスクが務めた。そこでは、ノイカたちが国外の反体制派の人間と親密な交遊をもったことが強調され、サドヴァ・マリアはそのような協力関係を築くことに貢献したと糾弾された。裁判記録には、ノイカと、反体制派の重鎮のひとりであったコンスタンティン・ピラトに対する罪状として以下のよう

に記されている。

コンスタンティン・ノイカとコンスタンティン・ピラトは、国益のために行なうべきである国外の労働人民の戦いとその実現に対して敵対する者であり、売国奴で西欧に逃亡したレジオナルであるエリアーデとシオランたちと同じ信条をもっている。エリアーデとシオランは、職業的な工作人員のように、あらゆる方法と手段を用いて P. R. P. に抗する陰謀をめぐらすという指令に従いながら、帝国主義者の諜報の役割を果たしている。ノイカとピラトは、違法な手段を用いることによって、これらの人物たち〔エリアーデとシオラン〕とふたたび関係をもつようになり、彼らの役割を担ってそれを忠実に遂行し、ルーマニア人民と人民共和国政府に対する中傷に満ちた、扇動的な内容である彼らの著作を国内に広めている⁽¹⁸⁾。

この後には、国外に逃亡したレジオナルは、西側諸国に旅行したルーマニア人を利用して、レジオナル的言論をルーマニア国内に導入し、国家の秩序を乱すことを企んでいると記されている。そして、サドヴァ・マリアは、国内外のレジオナルの交遊を取り持つことで、反体制運動に加担したと批判されている。

裁判においては、シオランとエリアーデの著書がルーマニア共産党にとってきわめて敵対的な内容を有し、国内で刊行が許可されている文学とは相容れないものであることがあらためて強調された。具体的には、シオランの『実存の誘惑』に収録されている論説「運命に関する小論」は、ルーマニア民族とその文化に対する「重大な侮蔑と中傷」であると批判され、その証拠として以下の文章が引用されている。本論説は、ヨーロッパ諸国や諸民族の特徴に関するシオランの私見

を綴ったものである。

私は蛮族の〔ルーマニア〕の出身であり、大侵攻の残りかす、「西方」へ歩み続ける力を持たないために、カルパチア山脈とドナウ河に沿ったあたりに倒れて眠りにおちた部族、ローマ帝国の辺境へ脱走した者の集団の出身である。過去がこの有様であり、そして現在も、未来も…⁽¹⁹⁾。

自分の一族、自分の国、あの無気力にとりつかれ移り気な農民たちを憎み、彼らの出自であることに顔を赤らめ、彼らを否認し、彼らの化石となった幼虫のような確信を拒否した。彼らの表情に反逆の様相を探してみても無駄であった。どのようにして彼らの後押しをしてよいのかわからず、私は皆殺しを夢見るに至った。しかし石ころを虐殺するわけにはいかない⁽²⁰⁾。

既述のように、『実存の誘惑』は、シオランがさまざまな機会に執筆した文章を収録した論説集である。シオランはみずからの思想を体系化することを極端に嫌ったため、彼の思想的特徴を端的に示すことは困難であり、本書の内容も要約することは難しい⁽²¹⁾。しかし『実存の誘惑』において、ルーマニアの後進性を皮肉った記述はごく一部を占めるに過ぎない。たしかにシオランは共産党と敵対関係にあったが、上記の引用文は、ノイカやサドヴァ・マリアを糾弾するために、全体の文脈を無視して抜粋されたものであると言える。

この裁判においてノイカは、サドヴァ・マリアからエリアーデとシオランの著書を受けとったことを認めたほか、自身の著書をシオランに送り、パリで刊行することを計画したり、シオランとその協力者と手紙を交わしたりしたことも認めた。しかしノイカは、これらの活動は共産党に敵対することを目的として行なったのではないと以下のように訴えた。

私が二年間でフランスのシオランから受け取った12通の手紙は、捜査機関に没収されました。これらの私宛のシオランの手紙は、R. P. R.の政府に敵対する内容ではありませんでした。

事実、私の手紙は、政府にとっては〔シオランの手紙〕よりいっそう不快な内容でありましたが、敵対するものではありません。不快にさせる内容であるというのは、挑発的で反抗的であるように思える文章が記されているからであり、R. P. R.政府の人間を侮辱する箇所さえみられるからです。

しかしながら、私の手紙は、国外の人間に対して、国に戻ることを促すものであったと考えています⁽²²⁾。

ここからは、ノイカがシオランの危機感をあおって帰国させるために、彼と手紙を交わしていたと弁明していることが読み取れる。さらにノイカは、モニカ・ロヴィネスク、ヴィルヅル・イエレンカらが担当していた亡命者向けのラジオ放送「自由ヨーロッパ」をルーマニア国内で聴いていた事実を指摘され、それに対して以下のように弁解している。

私は、ロンドンをはじめ国外のラジオ局の放送を合法的な方法によって聴いていましたが、「アメリカの声」や「パリ」の放送は〔ルーマニアに対する〕敬意を示すものでした。「自由ヨーロ

ツパ」は、それらの放送に比べると、敬意を欠くものでした。私はそれらのラジオ放送で聴いたニュースについて、好意的なコメントや批判的なコメントをさまざまなかたちで伝えてきました。誰に対してであっても、どのようなことであっても、話すようにしてきました。私が話した内容は、確かに、政府にとっては不快になり得るものでした。〔しかし〕私は、〔政府に対して〕敵対的なものであるとは思っていませんでした⁽²³⁾。

「自由ヨーロッパ」の放送に関しては、ほかの機会⁽²⁴⁾に取りあげたため、ここで詳述することはしないが、それはルーマニアの伝統文化を共産党の統制から保護するために、国内外の反体制派の活動を紹介していた亡命者向けラジオ放送であり、ルーマニア人亡命者のあいだにおいては反体制運動のシンボルとみなされていた。既述のように、エリアーデとシオランはロヴィネスクたちの反体制運動とかかわりをもっており、とりわけエリアーデは「自由ヨーロッパ」の放送に積極的に協力していた。共産党は、ノイカがエリアーデとシオランを通じて「自由ヨーロッパ」の活動に深くかかわるようになり、国内の状況を西欧社会に伝えることを警戒したと考えられる。

反体制派の重鎮のひとりとしてノイカとともに起訴されたピラトは、エリアーデとシオランの著書入手し、ほかの人間とそれについて意見を交わしたことを認めた。以下はピラトの証言である。

アクテリアン〔・アルサヴィル〕は、ハンガリーの反革命はマジャール民族の正当な革命であると話し、西欧がより積極的に介入すべきであったと悔やんでいました。

アクテリアンは、R. P. R.の社会主義リアリズム文学に関して、私と同じ意見をもっていました。すなわち〔R. P. R.の〕文学を規範的で非真性的とみなし、作家は唯物的利益であるとみなしました。文学新聞にコメントしたときは、幾人かの作家たちが行なったアンガー・ジュマンは強制されたものであり、心からのアンガー・ジュマンではないとみなしました。

〔テオドル・〕エネスクとは、ミルチア・エリアーデとエミール・シオランの著書について好意的な意見をかわし、シオランの「遠方の友からの手紙」の複写を一部、彼から受け取りました。そして私は、それをチェルノヴォデアヌとラディアンに渡しました。あとになってから、これはコンスタンティン・ノイカ宛ての手紙であるとききました⁽²⁵⁾。

「ハンガリーの反革命」とは、1956年10月にブタペストで起きたハンガリー動乱のことである。ルーマニア共産党は、ソヴィエトの侵攻に抵抗したハンガリーの首相ナジ・イレムを監禁し、処刑するための場所を提供し、動乱の鎮圧に協力した。一方、ルーマニア国内の反体制派は、ハンガリー動乱はスターリン主義からの脱却を試みた民主的運動であると好意的に評価する傾向にあった。上記の引用文からは、エリアーデとシオランの著書が反体制運動の渦中にいた人物たちによって、国内で刊行が許可された文学作品の対極に位置する、真性な文学作品として受け入れられていたことが見て取れる。

「遠方の友からの手紙」とは、ピラトが証言しているとおおり、ノイカ宛てに送られたシオランの手紙である。本書簡は、「自由」や「デモクラシー」といった西欧社会の理念を理想化する反

体制派のルーマニア人を諷める内容であり、西欧社会の傲慢や享楽、惰性が強調され描かれている。シオランは、東欧の共産主義が人間を抑圧する憎悪すべき体制であることにまちはないが、西欧社会を理想化し、西欧に追随することを目指す反体制運動には賛成できない考えをノイカに伝えたと考えられる。シオランのルーマニア論や政治論を論じることは本稿の目的ではないが、「遠方の友からの手紙」が、ルーマニアの共産主義のみを批判する内容であったとは考えられない。しかし本書簡は、「レジオナル」の一味であるシオランが書いたものであるために、ルーマニア国内で所持した者は、事情にかかわらず厳罰に処された。

裁判記録には、エリアーデの著作からの抜粋は記されていない。しかし、サドヴァ・マリアがパリでエリアーデから受け取り、国内に持ち込んだことで、反体制派が逮捕される原因となった『禁じられた森』は、共産党の政策に反する記述を含んでいることは明らかである。『禁じられた森』には、戦前の王制やレジオナルの活動にかかわったり、ソヴィエトの侵攻からルーマニアの文化財産を守ろうとしたりする登場人物が、スンジエーナやミオリツァといったルーマニアの民間伝承を伝えながら生きる姿が描かれている。レジオナルにかかわった人間を肅正し、ソヴィエトから輸入された共産主義の文化価値を広めようとしていた 1950 年代の共産党が、本書の記述を不適切とみなした可能性は高いと考えられる。

裁判では、被告に弁護人がつけられ、弁護の機会が与えられた。しかしいずれの弁護人も、公共の秩序を乱す活動を展開した証拠として提出されたエリアーデとシオランの著書の内容を検討することなく、彼らの著書を保持したことの罪を認めただけで、収監される期間を短縮するように求めている。判決では、ノイカとピラトに対して 25 年間の強制労働と 10 年間の市民権の降格処分、社会秩序を脅かす可能性のある私有財産の没収が宣告され、サドヴァ・マリアに対しては 8 年間の投獄と 5 年間の市民権の降格処分、社会秩序を脅かす可能性のある私有財産の没収が宣告された⁽²⁶⁾。

4. まとめ

本稿で取りあげた保安警察の供述調書や裁判記録からは、エリアーデとシオランがルーマニア国内の反体制派の知識人とかかわり合うことを望み、彼・彼女らの言論活動を支援したり、みずからの言論を国内に伝えようとしていたりしていたことが明らかになった。一方、国内の反体制派知識人たちも、レジオナルやフォークロアなどを積極的に描くエリアーデとシオランの言論を反体制運動に資するものとみなし、好意的に受け入れていたと言える。しかし、1959 年 11 月 9 日付けの供述調書に描かれたエリアーデとサドヴァ・マリアの対話から読み取れるように、エリアーデがルーマニア国内の状況をしっかりと把握していたとは言い難く、共産党のプロパガンダとして創作された文化を完全に否定しており、共産党支配下で生きているサドヴァ・マリアとは意見が食い違う部分もあったと考えられる。さらに、エリアーデは、亡命者が反体制運動を主導すべきであると主張しているが、共産党の情報統制の厳しさを訴えるサドヴァ・マリアの言葉は、エリアーデをはじめとする亡命者たちが国内の状況に無理解であることを批判しているように解釈できる。

本稿は、ルーマニアの反体制派と体制派の両陣営の資料からエリアーデとシオランに関する記

述を抽出し、整理することに力点を置いた。そのため本稿によって、エリアーデとシオランの著作がルーマニアの政治体制をめぐる闘争において担った役割やある種の暴力性が明らかにされ、あらたな解釈が示されたわけではない。しかし、ルーマニアの政治動向をめぐるエリアーデとシオランの言葉は、故国を共産党支配から解放することを目的としながらも、故国の人間や亡命者共同体に対する発言力を維持したいという思惑も有していたことが想定される。サドヴァ・マリアに関する供述調書を整理した限りでは、エリアーデとシオランが、共産党支配下のルーマニアに生活の基盤を持っている人間の存在をほとんど考慮せず、共産党政権の転覆を優先させようとしていた可能性が考えられる。もちろん、これらの資料が、反体制派を逮捕しようとしていた人間によって作成されたものであることは踏まえられなければならない。また、エリアーデとシオランの言論活動を批判することが本稿の目的ではない。

エリアーデが宗教史学者として示した宗教理論の現代的意味を再考し、シオランが思想家として記した言葉の意味を問い直す作業は、これからますます重要なものになっていくと考えられる。しかし、エリアーデとシオランの言葉は、ルーマニア国内の人間との関係性を維持するために記されたという性質を帯びているため、国内の反体制派および体制派の人間によってどのように理解され、受容されていたのかを明らかにし、その倫理性と政治的意味を問い直していく作業は、エリアーデとシオランに関する研究だけでなく、ルーマニア文化史研究においても、不可欠であると考える。本稿は、そのための準備作業として位置づけられる。

*本稿は、日本宗教学会第 73 回学術大会での研究報告「ルーマニア保安警察の供述調書におけるシオランとエリアーデ」に基づいている。

*本稿は、平成 25 年度日本学術振興会特別研究員研究奨励費による研究成果の一部である。

註

- (1) 奥山史亮「ステインハルトの『幸福の日記』におけるエリアーデ宗教学に関する言及」『宗教学研究』第 381 号、日本宗教学会、2014 年、181 - 205 頁。奥山史亮「モニカ・ロヴィネスクの反体制運動におけるエリアーデ宗教学の展開」『東京大学宗教学年報』XXXI、東京大学宗教学研究室、2013 年、35 - 47 頁。
- (2) ルーマニアの政治をめぐるエリアーデの見解と、シオランやロヴィネスクらの見解は必ずしも一致するものではない。亡命者間の見解の異動を明らかにする作業は、これからの課題である。
- (3) Stelian Tănase, *Anatomia mistificării*, Humanitas, 2003, pp. 65 - 66.
- (4) Ibid., pp. 68 - 70.
- (5) Ibid., pp. 60 - 61.
- (6) サドヴァ・マリアが、共産党の密偵として活動したにもかかわらず、シオランやエリアーデらに協力した「本音」については、保安警察の供述調書や裁判記録から読み取ることは困難である。彼女は、共産党によって一定の身分を保障されており、不自由のない生活を送っていた。当時のルーマニアに生活の基盤を有していた彼女が、共産党に抵抗したり、亡命したりすることは困難であり、またそのような必要性を感じることもほとんどなかったと思われる。

る。一方、彼女が学生時代に交遊した人物には、戦後、レジオナルとして厳しい監視下に置かれるようになった者が少なくなかった。供述調書によると、彼女は、レジオナルの疑いをかけられ、配偶者が投獄されたり、貧困に苦しむようになったりした友人たちに、物資の支給などの支援を秘密裡に行なっていたという。彼女が、友人たちを支援した動機は、レジオナルの思想に賛同するという政治的なものではなく、親しい間柄にあった人間を見捨てることはできないという感情に基づくものであったのではないだろうか。亡命者であったエリアーデとシオランに対しても、国内の友人たちを支援するのと同じような感覚で協力したことが推測される。共産党下のルーマニアでの生活を維持することを望むと同時に、戦前からの交遊を維持することも望んだことが、サドヴァ・マリアの「本音」であるように思われる。

- (7) Stelian Tănase, *Anatomia mistificării*, p. 60.
- (8) *Ibid.*, pp. 61 - 62.
- (9) 奥山史亮『エリアーデの思想と亡命——クリアヌとの関係において』北海道大学出版会、2012年を参照。
- (10) Stelian Tănase, 2003, pp. 62 - 63.
- (11) *Prigona, Documente ale Procesului C. Noica, C. Pillat, N. Steinhardt, Al. Paleologu, A. Acterian, S. Al-George, Al. O. Teodorescu*, ed. Cristina Cantacuzino, Silvia Colfescu etc., Editura Vremea, 1996, p. 143.
- (12) これらの証言は、長時間に及ぶ過酷な取り調べによって強制された可能性が高く、サドヴァ・マリアの真意に沿うものであると判断することには慎重でなければならない。
- (13) この手紙は『歴史とユートピア (*Histoire et utopie*)』に収録されている。
- (14) ノイカは本書をシオランやサンダ・ストロジャンの協力を受けてパリで刊行することを試みた。
- (15) Mircea Eliade, *Fragments d'un Journal, I, 1945 - 1969*, Gallimard, 1973.
- (16) シオラン、金井裕訳『カイエ 1957 - 1972』法政大学出版局、2006年、75頁。
- (17) 起訴された人間は、コンスタンティン・ピラト、コンスタンティン・ノイカ、アクテリアン・アルサヴィル、アクテリアン・サドヴァ・マリア、ニコラエ・ステインハルト、セルジル・アル＝ジェオルジェのほか、Ion Mituca, Sandu Lazarescu, Gh. Florian, Constantin Ranetti, Emanoil Vidrascu, Alex. Paleologu, Beatrice Strelisker, Iacob Noica, Nicolae Radian, Aurelian Vlad, Constantin Raileanu, Nicolae Iordache, Teodor Enescu, Remus Niculescu, Alexandru Teodoreanu, Anca Ionescu, Sanda Mironescu の23人である。
- (18) *Prigona, Documente ale Procesului C. Noica, C. Pillat, N. Steinhardt, Al. Paleologu, A. Acterian, S. Al-George, Al. O. Teodorescu*, 1996, p. 288.
- (19) *Ibid.*, p. 289. これは、篠田知和基訳『実存の誘惑』国文社、1975年、60頁からの抜粋である。しかし、裁判記録では、幾つかの文章が削られている。
- (20) *Ibid.*, p. 289. 前掲書、60頁。これも上記と同じく、幾つかの文章が削られている。
- (21) シオランに関する国内のまとまった研究には、藤本拓也の博士号申請論文『シオラン宗教思想の研究——神への欲求と無信仰』東京大学大学院人文社会系研究科、2012年がある。
- (22) *Prigona, Documente ale Procesului C. Noica, C. Pillat, N. Steinhardt, Al. Paleologu, A. Acterian, S. Al-George, Al. O. Teodorescu*, p. 334.
- (23) *Ibid.*, p. 335.
- (24) 奥山史亮「モニカ・ロヴィネスクの反体制運動におけるエリアーデ宗教学の展開」『東京大

学宗教学年報』XXXI, 2013年, 35 - 47頁。

- (25) *Prigona, Documente ale Procesului C. Noica, C. Pillat, N. Steinhardt, Al. Paleologu, A. Acterian, S. Al-George, Al. O. Teodorescu*, p. 342.
- (26) いずれも、のちに恩赦により、減刑された。